

九州産業大学大学院

KYUSHU SANGYO UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL



令和2年度 研究成果発表会

タイプC行動パターンの変容可能性について

博士前期課程

国際文化研究科 国際文化専攻 臨床心理学研究分野

射原和海

主査 稲田尚史
副査 小林純子
木舩憲幸

方法

調査対象

X大学の学生を対象とし質問紙調査を行った。回答者数84名(男性29名、女性55名)を分析の対象とした。

調査内容

- ・ SIRI ←タイプC傾向度を測る
- ・ 過剰適応尺度 ←過剰適応傾向度を測る
- ・ 特性不安尺度 (SATI) ←不安の高さを測る
- ・ Marlow-Crowne社会的望ましさ尺度 ←自分を社会的によく見せようとする傾向を測る

調査時期と手続き

2020年6月～7月、上記の内容にフェイスシートを含む質問紙調査をグーグルフォームを用いてオンライン上で実施した。調査に際しては、倫理的配慮に関する説明を行った。

結果

- SIRIと過剰適応尺度の相関
 - 「反情緒」と「他者配慮」で弱い正の相関
 - 感情的にならない人は、他者に配慮する
 - 「社会的同調」と「自己抑制」で弱い正の相関
 - 人との和を大切にすることは、自己を主張しない
 - 「社会的同調」と「自己不全感」で中程度の正の相関
 - 人との和を大切にすることは、自分に自信がない
 - 「社会的同調」と「期待に沿う努力」で中程度の正の相関
 - 人との和を大切にすることは、他者の要求に応えようとする
- 抑圧の有無によるSIRIと過剰適応尺度の平均の比較
 - 期待に沿う努力と他者配慮の因子において抑圧群が非抑圧群より高い
 - 抑圧群が他の人と比べて期待に沿う努力と他者配慮的な行動が強い

- ・ 抑圧の有無による群ごとのコレスポネンス分析
- ・ タイプCの項目それぞれの行動についての変容可能性の違いを視覚的に検討するため、全体、抑圧群、その他群ごとにコレスポネンス分析を行った。
 - 抑圧群は非抑圧群に比べて感情に従って行動できるようになりたいと思っていること、常に論理的に正しい行動をとりたいと思っていることが確認された。また、変える難しさについて、抑圧群は半分以上の項目について変えることが難しいと評価しているが、非抑圧群では全ての項目について変えることは可能であると評価していた。

まとめ

・タイプcと過剰適応

タイプc

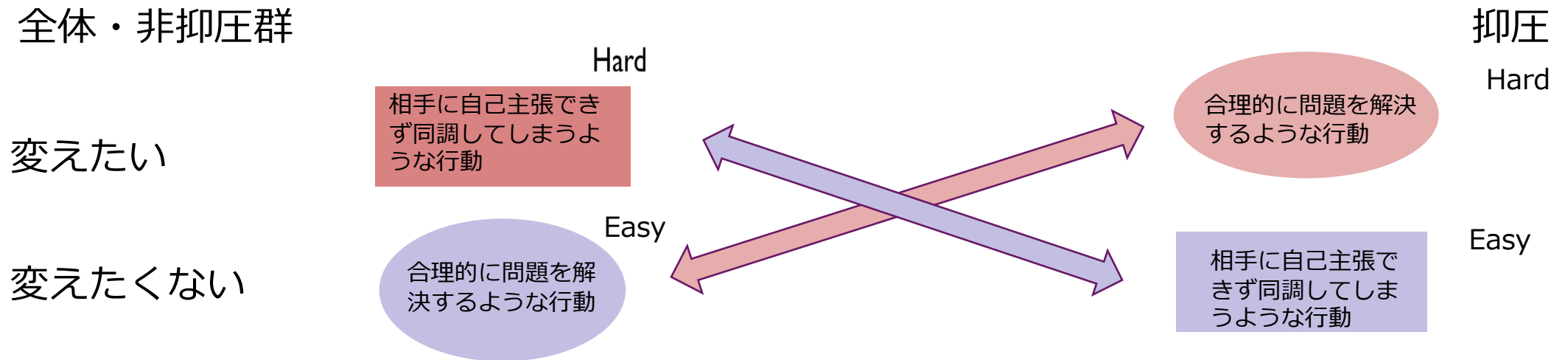
- ・相手に配慮→反情緒
- ・自分に自信がない→社会に同調する

過剰適応

- ・自己抑制<他者配慮が反情緒的傾向を高める
- ・人から良く思われたい欲求は過剰適応独自の因子

・タイプc行動の変容可能性

全体・非抑圧群



指導教員コメント

本研究で取り上げられた「タイプC」とは、がんの発症や進行とも関連が示唆されている性格特性である。そのため、「タイプC」特性の変容可能性を明らかにすることは、がんの予防にも寄与しうると考えられ、興味深い。

稲田尚史